

訪韓 新しい時代へ交歓の旅

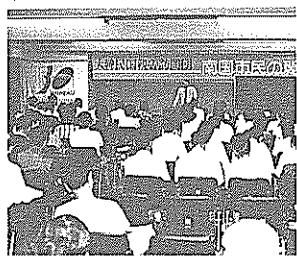
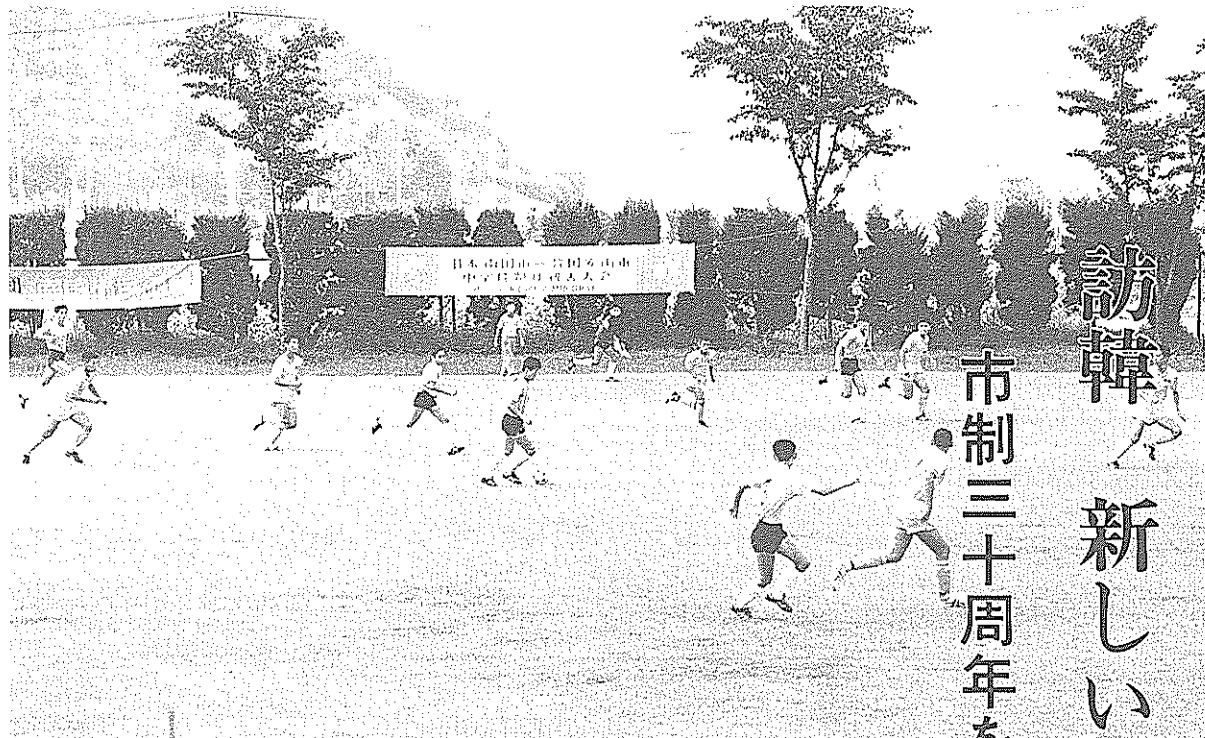
市制三十周年を記念して

市民の翼が実施される

国際化への対応は二十一世紀に向けての重要な課題ですが、真の国際化は、まず近くの国との相互理解が第一歩。そこで市制施行三十周年記念事業の一環として、韓国に国際チャーター便を飛ばし、交流や研修を行う「市民の翼」が、八月二十四日から二十八日まで四泊五日の日程で実施されました。

団員は市長を総団長に、親と先生の教育視察団、文化交流視察団、スポーツ交流視察団、産業視察団、市民交流団の五団、総勢百五十五人。それぞれの目的に応じて密度の濃い視察研修を行いました。

この成果は、参加者一人一人の感想文の形で、一冊の報告書にまとめられることになっています。



事前研修で訪韓に備える

一行は、八月二十四日、高知空港で出発式を行った後、午後十二時三十分、南國を離れ、一路韓国へ。約一時間の快適な空旅の後、釜山空港に到着しました。

到着後、産業視察団は早速釜



慶川市との交歓会でまほろば囃子を披露

山一の規模を誇る砂利石（チャガルチ）市場を訪れ、釜山魚介類処理組合（黄長深組合長、組合員四百五十七人）で説明を受けた後、組合長の案内で市場を視察。国際的な取り引きも行われるというその活気あふれる様子に目をみはっていました。

その夜は、宿泊先のゴロンホテルで、慶州市の関係者を招いて交歓会が開かれ、両国の音曲や舞踊を披露。まほろば囃子の演奏も行われ、組曲「慶州」の中で韓国の民謡「アリラン」の一節が流れると、会場から思わず拍手がわき起こっていました。

二日目、泰陵（テヌン）中学校との練習試合のために、一足先にソウルに向かったスポーツ交流団以外は慶州市内を観光。

新羅王朝時代の古都の雰囲気を残す街並みに、日本文化のルーツを感じていました。

また、産業視察団はこの日、農村の自力更生を目指すセマウル運動農業を視察。運動の地区リーダー李慶雨慶州青年会長の農場を見て回りました。説明の中で李さんは「農家は普通のサラリーマンの倍以上の収入はあるが、今の女性は汗にまみれて働くことを嫌う」とボツリ。日本と同様の花嫁難がここにもあることをうかがわせました。

三日目は、親善試合観戦のため、全団が安山市へ。安山市は、南國市のミロク機械㈱との合併

後、全団が安山市へ。安山市は、南國市のミロク機械㈱との合併



元谷中の生徒と談笑

会社コリア・ミロクのある人口二十万人ほどの新興工業都市です。

親善試合の前には、教育視察団は、安山市立元谷（ウォンゴン）中学校（金康鎬校長、生徒数一千八百三十三人）を訪れました。

一行は教室へ入って説明を受けましたが、愛国心や秩序、礼儀を重んじる教育目標を聞き、改めて日本の教育を見つめ直していました。続いて、教室を回って授業風景を参観。男女共学ながら、男子クラスと女子クラスに分かれていることに驚いた様子でした。また、ちょうど休み時間にな



コリア・ミロク本社工場を訪問

つて教室から出てきた子供たちと早速身ぶり手ぶりで話したり、記念写真を撮ったりしている団員もいました。

一方、市長一行は、産業視察団とともにコリア・ミロクを視察した後、李相龍安山市長を表敬訪問、一時間余り歓談しました。

午後は、第一スポーツセンターで元谷中のサッカーチームと南國市選抜チームの親善試合が行われました。ペナントを交換した後、キックオフ。全員が三十周年記念のTシャツで見守るなか、緑あざやかな芝生のコートで熱戦が展開されました。前半早々、まず南國チームが先取点、実力はほぼ互角でしたが、結局五対二で南國チームが勝ちました。試合終了後、両チーム



交歓会場で安山市長を出迎える市長

の選手は互いにユニフォームを交換、健闘をたたえ合いました。元谷中チームのコーチは「安山市にはほかに中学生のサッカーチームがないので、このような機会がもっと増えれば」と話していました。

試合の後は、元谷中のサッカーチームも招いて、同センターで交歓会。まず南國市長が「これから末永くお付き合いをお願いしたい」とあいさつ。これを受けて安山市長は「歴史の過去は過去として将来に大きな期待を持っている。今後助け合って発展していくことを望む」と述べました。会場ではあちこちに人の輪ができ、言葉は通じないながらも終始和やかな歓談が続いていました。また、試合を

終えたばかりの選手たちは、住所を交換して文通を約束するなど、すっかり打ち解けた様子。市長も「できれば来年南國市に遠征を」と提案していました。

四日目は全団揃ってソウル市内を回り、オリンピックスタジアムなどの見学や買い物を楽しみました。

最終日には、教育視察団がソウル日本人学校（大西祥次校長）を訪問。まず概要説明を受けましたが、その中で、学校単位での交流はあるが、地域の中で韓国人との交流がないという問題があることも話していました。

午後十二時三十分、全日程を終えた団員は、それぞれの成果と思い出を胸に、金浦空港を離陸しました。



すっかり打ち解けた両市の選手たち

안녕하십니까 わたしの訪韓記



真の国際化とは

福重完尋(A団)

高知空港から釜山まで五十分くらい。確かに近い国だなあと実感した。機上から見た釜山は、白い石山がすぐ近くにあるすばらしい近代都市で、これが韓国の玄関かと驚く。

五日目に日本人学校を訪問。日本のどこにも見られるやや古びた校舎。体育館で校長先生の説明を聞く。

教育目標は、世界の子供、心豊かな、たくましく、外観設備はスマートではないが、いい目標を持って育っていると思つたが、韓国人との交流はないという。日本人学校の子供の家には韓国人のメイドがいるため、親の韓国人に対しての態度が問題であるということだ。保護者の教育がたいせつであるらしい。

また、教師は日本全国からの募集で、任期三年。教育への取り組みに限界がある思いがした。南国市選抜チームと元谷中学校チームがサッカーの交流をしている一方で、韓国にいながら鎖国的な日本人学校。ある学友は、



ハングル語を勉強する日本人学校の生徒

これは経済力の格差で韓国に経済力さえつければ解消されると言っている。いつのことかと期待しながら日本人学校を出るが、それだけで解決できる問題だろうか。

最後に、国際感覚豊かで知性あふれたガイド朴春子さんの人間性に触れて、国際親善はもとより、それぞれが深い感銘を受けたことは、この上ない幸せであったと思う。

意義ある

新しいきずな

林 廣裕(B団)

慶州のコーロンホテルにおいて親善晩餐会が開催された。新



2日目には仏国寺を見学

わすか四泊五日のかいま見る

成果は努力の

たまもの

岡峯二郎(C団)

何事も成果を上げるにはそれなりの努力が必要だが、C団の成果も出発前日までの猛練習とチームワークづくりという努力あつての成果である。四校からの選抜チームを短期間に錬え上

げた大野監督を中心とした四校の監督のご指導と、それに応えた選手たちの真剣さをたたえたい。

選手たちは、韓国でも毎朝六時起床でトレーニングを続け、その結果が好試合になったのだが、親善試合が終わった翌日もいつものとおりトレーニングを続けていたのは頭が下がった。普通なら試合が終われば「翌朝はゆっくり休めよ」と言うところだが、このような監督に指導を受けた二十人の選手たちが、二十年後の市制五十周年に大きな役割を果たしていることを期待している。



文通を約束

行政と住民が

手を取り合って

渡辺 毅(D団)

セマウル運動農業視察のリーダーの方の話を伺ったが、農業に対して生きがいを感じ、仕事に誇りを持って活動していた。

そのなかで「自分たちの手でできる範囲は自分たちの手で取り組む」という話があった。ともすると「おや、何を意味しているのか」と言われそ



サッカーを観戦する中学生

うだが、何から何まで機械に頼ったり行政に頼ったりせずに、施設の改善なども自分たちの手で行っていく農業に取り組むということだと思つた。

リーダーの家への道も横幅三〇センチの畦道である。「なぜ市に道を広げてくれという要望を出さないのだろうか」と考えたが、「今道を広げなくても生活に困

るわけではなく、いつかは広げなければならなくなる」という話が耳に飛び込んできた。

行政だけ、あるいは住民だけで町づくり、人づくりができるものではない。互いに耳を傾け、一人一人が持てる力を出し合い、目標に向かって長い目で町づくりを取り組むことの必要性はわかっていながら「自分自身さえよければよい」という考えで過ごしてきたのではと振り返ったものだ。

ほんとうに真心、優しさがあつた。日本人、特に今回市民の翼に参加した各団員にもそれに負けないくらいの優しさ、思いやりがある。この気持ち、結び付きが、南国市の発展の源になると、旅を終えた今、思う。

4日目民俗村を見学



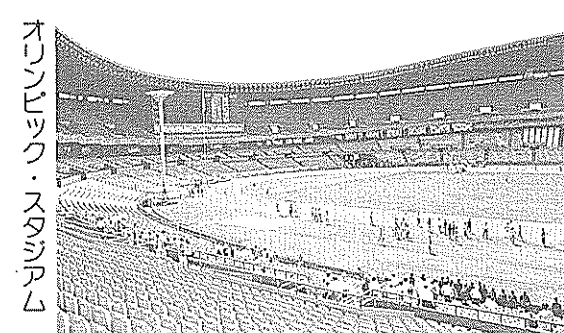
シムート



セマウル運動を視察



慶州市の古墳公園



オリンピック・スタジアム